

策定年月	令和5年5月
見直し年月	令和 年 月

麦・大豆国産化プラン

産地名：岩手県紫波産地

(作成主体：株式会社高橋農園)

1. 麦・大豆生産の現状と課題及び課題解決に向けた取組方針

1.現状と課題

本地域で生産している小麦は、「ゆきちから」、「もち姫」全量がパン・中華麺用として、町内の製粉企業(株式会社東日本)に販売されている。近年、小麦作付面積は横ばいで推移しているが、単収は県平均と比較して単収が高いが、収穫時期が梅雨時期のため湿害が原因となっている。単収低下の原因として、作付頻度の増加による地力低下や連作障害が考えられ、土壌診断に基づいた土壌改良資材の施肥やブロックローテーションによる作物の切替を計画的に実施する必要がある。また、収穫時期が梅雨の短時間で収穫する必要があり、搬入施設の効率的な稼働計画と施設の再整備が必要である。

大麦はビール製造会社との販売契約を取っており、高い品質の大麦が安定的に供給が必要になる。品質の安定化のためには低温かつ遠赤外線乾燥が可能な乾燥機が求められるが、現在所持していない。そのため乾燥機の確保が課題となっている。

2.課題解決に向けた取り組み方針

①需要に応じた生産と販売の実現

実需から要望される品種作付けを基本として、生産者サイドとしては播種時期(作型)や収量性も考慮に入れて品種の選定を行っている。

②団地化の推進

人・農地プランによる農地集積の推進をしつつ、団地化に向けた話し合いを行い、ブロックローテーションによる団地化の計画を作成する。

③土づくり

低収圃場の土壌診断を行い、土壌pHを確認したうえで、pH6~6.5を目標に石灰質肥料を投入する。一度に実施するのではなく、輪作体系のなかで徐々にpHを矯正していく。

④排水対策

排水対策として、農家が自らできる弾丸暗渠や明渠、うね立て栽培など耕種的な方法を講じる。また、隣接する水田からの漏水や、湧水による湿害対策として、圃場全体の地下水位を低下させる方法として、ブロックローテーションを実施する。

③と④について、農研機構が作成した「診断に基づく小麦・大麦の栽培改善技術導入支援マニュアル」を活用する。

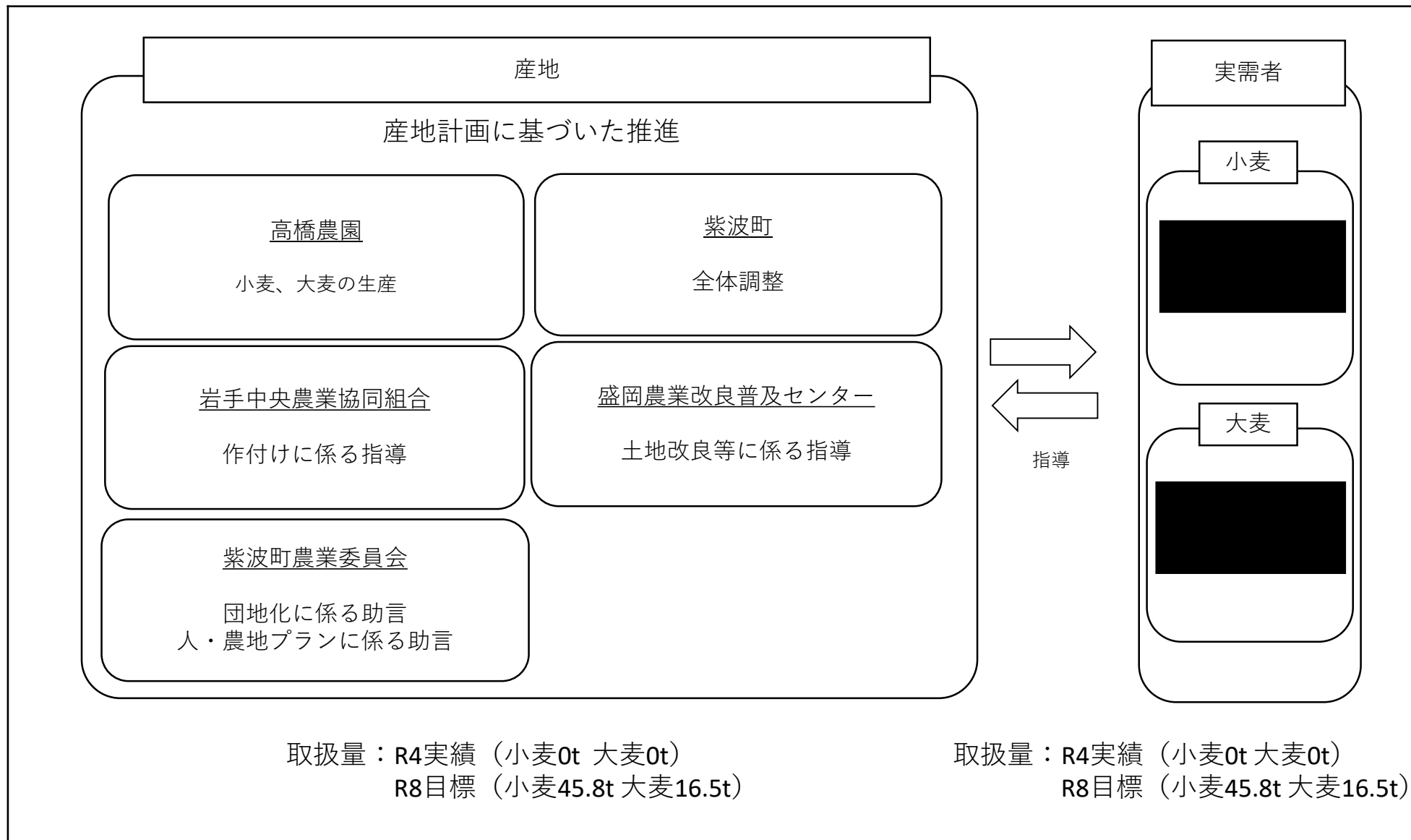
⑤収穫作業の効率化

リモートセンシング技術などを導入し、圃場ごとの生育の早晩を判定して精密な収穫日予測により刈取りの順番を決定する。その収穫の順序により施設の搬入計画を立てる。

⑥新たな需要の拡大

学校給食や食品製造業者等へ地場産活用の働きかけを行う。食品製造業者や行政と連携し、新たに商品開発を行う。

2. 産地と実需者との連携方針



3. 麦・大豆の国産化に向けた推進体制及び各関係者の役割

